

トライフィンが主流なのはなぜか？ これからもそれは変わらない？

プロサーファーとして活躍し、シェイパーとしても名を馳せ、現在はASPジャッジとして活躍し、世界の最先端サーフィン事情にも詳しい小川昌男さんにこんな難題をぶつけてみた。

「難しい質問ですね……。うーん……。はじめてトライフィンが登場した時を振り返ってみると、その当時はシングルかツインか、どちらかというツインという感じの流れだったんですよ。そんな時にトライですね。当時ツインに乗っていたサーファーはバックフィンがついたトライなんて動くはずはないと思ったんですよ。ツインのターンから考えると、バックフィンがロックしそうなイメージを持ってしまった。だから最初はとっつきにくいどころか試さないサーファーも大勢いましたよね。そんな状況の中、サイモン・アンダーソンがトライフィンにのってベルズとパイプラインのコンテストで優勝。もうそれは衝撃的でしたよ。僕も同じサーファーとして、サイモンのパイプでのバックハンドにはビックリしましたし、あのトップへの上り方はそれまでにないサーフィンでした。それからシーンはトライになっていったんですよ。

もちろん同じトライフィンと言えども、ずっと同じデザインではないですよね。当然。トライの中でも

大きく変わったのはケリー・スレーターが登場してからだと思います。強いロッカーのコンケーブボードになった。時を同じくして、ジャッジの基準もスピードとパワー、そしてどこで技を繰り出すかというのをより重視するようになって現在に至っています。それまではラインや奇麗な乗り方も重視されていたんですね。そして世界のトップステージWCTでは現在、トライフィンでより過激なサーフィンが繰り広げられています。この流れはしばらく変わらないと僕は思っています。もっと過激な方向に向かうと予想されますし、ただ、WQSでは少し事情が違います。WCTとは違ってビーチのヒザ波でも試合をするわけですよ。そうするとWCTの舞台とは違ったボードがフィットする場合もあるわけです。実際、小波なんかではクアッドでヒートに望むサーファーも出てきています。これはWQSにおいては有効になるかもしれないし、使用する選手も少しずつではありますが増えてきています。クアッドがWCTでどうなのか、というよりは、フィンの数やデザインではなく、素材に注目が集まってきている感じもしますよね。いずれにせよ僕はトライフィンが、まだしばらくはトップステージでは使われ続けるとしています。ただ、トライフィンが登場するちょっと前までは、ト

ライが主流になるなんて想像すらできませんでしたけど(笑)。だから何が出来るかはわかりませんよ。

ここまではコンペティションの話でしたが、もっと一般的に考えてみても、やっぱりトライが大多数ですよ。それはやはり、アウトラインがどうのこうのではなく、3つのフィンというものが非常に有効なんだと思っています。最初に僕がトライに乗ったとき思ったことは、簡単なボードだなと感じたんですね。加速するし曲がるし、バックフィンがしっかりと水を捉えるから、3枚のフィンが有効に作用しているのでしょう。ラインが途切れてもつなげられる。でもシングルフィンだとそうはいきません。トライは乗りやすいセッティングなんですよ。普通の人でもある程度乗れてしまう。

話は変わりますが、ジョエル・チューダーがミディアムサイズのシングルフィンに乗っているのを見ると、カッコイイじゃないですか。そしてメチャクチャ上手いとわかる。サーファーなら自分もあんな風に乗ってみたいと思うじゃないですか。でもジョエルがそれで試合に出たってセクタイに勝てない。でもあんな風に乗ってみたい。コンペティションでなければ何に乗っていいんですよ」

—ASPジャッジ 小川昌男さん



世界でいちばん危険な波は、どこですか？



CYCLOPS

オーストラリアの荒涼とした南西沿岸に位置する、想像を絶するライトハンダー

「世界で一番危険な波がブレイクするポイントと言えば、サイクロプスであろう。オーストラリアの荒涼とした南西沿岸に位置し、波質は想像を絶するほどシャローなライトハンダー。まとまったグラブスウェルが捲り上げながらインド洋から押し寄せてくると、シャローな花崗岩の壁へとヒットする。沿岸に点在する200近くの島々の中の、とある島の沖合いに存在するサイクロプスは、ホームズオデッセイに登場する残酷な片目の獣からポイント名が付けられた。このポイントで初めてサー

フしたのは、2002年、マイク・パーソンズとブラッド・ガーラックによるものであったが、両者ともディープなポジションからチューブを狙うには至らなかった。実際、それほど危険な波であったのだ。最寄りの病院は、最低70マイルは離れている。ポイントから船で8時間、それから車で4時間以上。そうしたことを考えなければならないほど、シリアスなところなのだ。ポイント自体はシークレットとなっているが、サイクロプスの噂が口コミで広がると、アルフィ・ケーター、マーク・マシューズ、コビ

ー・アバートンといったサーファーがポイントにやってくる。チューブへと誘われていった。当然、彼らもひどいワイブアウトに見舞われ、シャローなリーフへと一掃されてしまった。このポイントで命を落としたサーファーはいないが、ボディボーダーの中には大怪我をしたものもいる。プロのチャド・ジャクソンは、リップにヒットした際に背中をやられてしまったが、幸い死に至ることも、不慮となることもなく生き延びることができた」

——本誌コントリビューター ビル・シャープ

MAVERICKS & SHIPSTERN

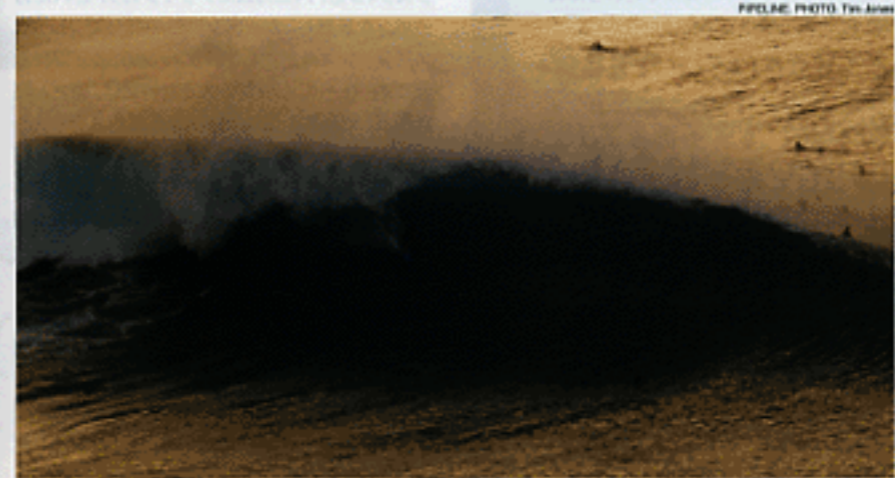
水中で呼吸器官にショックを与える、冷水ビッグウェイブスポット

「サーファーが危険な波について話している時、水温を考慮に入れるものはないと思う。一般的には、誰もが大抵のサーフポイントのような極めてシャローなリーフ形状について言及しているであろう。確かに、ドライリーフ上でのビッグウェイブは、死の危険が伴うが、他の危険要因も基準に入れてみたらどうであろうか？例えば、冷たい水温とビッグウェイブといった感じで、その基準で行けば、私が考える危険なポイントは、北カリフォルニアのマベリックスとタスマニアのシップスターンである。ビッグウェイブでワイブアウトした際、水中で呼吸器官に大きなショックを与える冷水に焦点を当ててみよう。たとえ先端技術を使用した最新のウェットスーツを身に纏っていたとしても、水中で巻かれている時、凍えるような水温の海況では、体までもウェットスーツがコントロールしてくれることは不可能である。当然、

「どれほどのサーファーが、冷水で命を落としたのか？」といった疑問を持つものもあるだろう。明らかに、シャークアタックなんかよりも数は限りなく少ない。最も有名な例は、10年前に秋のマベリックスで起こったハワイ出身のマーク・フーの死であろう。事故が発生したのは、前日にサンセットビーチで楽しんだスウェルを追いかけ、翌日にマベリックスに到着した日の朝であった。マークも、他のサーファー同様、ホノルルからアメリカ本土へ飛びフライトに夜中乗り込んでいた。アイデアとしては、ノースショアにスウェルを押し寄せたストームを追いかけ、最終的にはメキシコのバハ北部へと南下していくストームのスクェルをカリフォルニアでキャッチすることだ。その日、マークはマベリックスでビッグセットのリップを喰らい、腫分と長いこと水面に浮上できなかった。水中でボードがヒットしたのかもしれない

し、そうでないのかもしれない。おそらく、冷たい水温によって肺の息をすべて出し切ってしまう、そのショックから意識を失ったのかもしれない。そのため、泳いで水面に戻ってくる力が尽きてしまったと思われる。マークは私の親友でもあったため、彼の死を伝え聞いたあの日を一生忘れられることはないだろう」

——本誌コントリビューター バーニー・ペイカー



PIPELINE

命を落としたり重傷を負う者が後を絶たない、聖地ハワイの槍舞台

「危険の溢れたサーフスポットは数々あるけど、最も危険な場所と言えば、自分自身の心にある。そこでのテイクオフポジションについて波を掴めば、間違わずに自分のサーフィン史に刻まれる。他のポイントでは、そんなことはないのに、ロータイトのショアブレイクなんかは、とんでもなく危険。そのポイントと胃を並べる場所は、世界を見渡してもどこにもない。その場所とは、すごい有名なハワイのオアフ島に存在するパイプライン。骨が砕けたり指を引きちぎるほどの溶岩石上に、西スウェルが炸裂するとパイプラインは姿を現す。このポイントでは、何年にもわたり、他のポイント以上に怪我人を出し続けている。パイプの名前は、数名のサーファーが命を落としたり、数々の重傷を負っているにも関わらず、支持されている。最も重傷を負ったケースを見てみると、ミスター・パイプラインことジェリー・ロベスの名前も挙がる。ジェリーでさえも、生命を脅かすほどの波のパワーに対して圧倒させられてしまうのだ。彼の場合、腹内傷に重度の怪我を負い、120針の治療を余儀なくされている。ハワイアンプロのジャック・

ジョンソンもまた、パイプマスターズのヒート中、背骨を折ったり深刻な脳損傷を負うという犠牲を払ったが、パイプでの事故後も人生は続いていくと証明するかのよう。今では世界的に有名なミュージシャンとなっている。残念ながら、タヒチで注目を集めていた若手タヒチアンサーファーのマリックは、パイプでサーフィン中に命を落としたと言う事実もある。

このように毎年、毎年ノースショアのパイプでは犠牲者が留まる事知らず、肉離れ、肩の脱臼、鼻や足の骨折、脳損傷、死と数知れず。そのため、それだけの覚悟が必要との認識が広まり、波自体への批判は一切ない。また、メイクできれば最大限の喜びが得られるため、リスクもパイプのアビールポイントとなっている。

現在、オーストラリアでは音楽チャートを賑わす人気ソングがある。それはサラ・ブラドックという若手女性シンガーの「What the sea wants, the sea will have」という曲である。そんな彼女が、パイプを思いながら心から歌うことができるだろうか？」

——本誌コントリビューター ビーター・サイモンズ

ALL ABOUT DANGER

波以外にもこんなにある、サーフィンの危険要素

「サーフィン可能な国で戦争中の土地は、それほど多くはないが以下の国には注意。ソマリア、イエメン、フィリピン南部、イラン、パキスタン、イスラエルのガザ地区、レバノン、ナイジェリア、アルジェリア、コロンビア。衛生面に関しては、多くの国で、風邪をひく恐れがあるが、神経質にはならないように。自分の国で暮らしていても風邪はひくものだし、一番危険な病原体といえばマラリアであり、インドネシア、アフリカ西部、メキシコなどが危険であるため、適切な予防対策と最新情報を入手するためにも定期的に病院に行く確認しよう。A型肝炎を予防するには、汚い川や乾燥した国での糞便後のサーフィンを避け、生ものを食べる際にはしっかりと洗うことは忘れないように。ちなみに、プロサーファーのジェイソン・アップルシヤは、今年セネガルで肝炎を患っている。安全面については、都市部のすべて、ブラジルの貧民街、メキシコやニカラグアのビーチなどで問題となる。ただ、当然ながらカリフォルニアやハワイなど、どこであろうか悪いやつはいるので気が抜けない。これまで、メキシコ、エクアドル、ペルー、ヴェネズエラ、南アフリカのダーバンやヨハネスブルグのビーチで強盗の被害が発生したことを耳にしている。サーフ上の危険といえば、シャークアタック(南アフリカ、オーストラリア、レユニオン島、フロリダ、カリフォルニア北部)へヴィウェイブ(ジョージア、ノースショア、シャークアイランド) シャローウェイブ(ロータイトのバタンバタン、南太平洋上のサーフポイント)、ローカル色の強いポイント(リナダベイ、カクタス、ノースショア、カナリア諸島のランザローチ、リオ一のポイント)、強烈なカレント、大きな岩場などが挙げられる。最後に、一番危険なサーフポイントは、シドニー南部のアワーズであると私は考える。YouTubeを見てもらえば、わかるはずだ」

——サーフィンジャーナリスト アントニー・コーラス